



日々好日は信心から

# 日々好日

六七八号

(令和七年八月発行)

佛教が我国に定着したのは先祖供養に負うところが大きいという。その先祖供養も年回忌から春秋のお彼岸、そしてお盆があり、その他にも戦災や自然災害の犠牲者の慰霊祭があり、そうした供養にも漏れた餓鬼ボトケの施餓鬼会もあります。

佛教では死後趣くところとして極楽往生と六道輪廻が説かれますが、お盆はその何れとも異なり、ご先祖さまは我が家から程遠からぬ山に居て迎え火を見て我が家に帰って来られる。そして生前に為したようにお持て成しをして、また送り火とともにお帰り頂くというのが日本民族の古来からの習俗で、それが我国のお盆の行事なのです。

お位牌を仏壇から出して別に設けた精霊棚に祀り、お墓で灯した燈火を提灯に移して持ち帰り、精霊棚の灯籠に移すのが精霊迎えである。お盆の住職の檀家参りを棚経と称するのはこれによるのである。精霊は茄子や胡瓜でつくられた馬や牛に乗って帰られるというのも麗しい光景ではないでしょうか。

時代は如何に変わっても、亡き親や先祖を思うところを失うということは、生き抜く指針をなくしたに等しい。

## 弘法大師のお言葉

「林鳥、猶、反哺を知る。  
尤霊、豈、能く遺忘せんや」

(性霊集卷第八)

(林の中にいるカラスさえ親に育てられた恩に応えようとする。万物の霊長たる人間はそれを忘れてはならない)



仏法  
非遥

心中  
即近

真如  
非外

楽身  
何求

日々好日

たけなほ





ません。

小・中学生の頃何度か広島島の原爆慰霊碑をお参りし資料館にも足をこびました。原爆ドームは印象深いものでしたが、引き取り手のない原爆犠牲者の遺骨が納められている供養塔の存在を知ったのは成人してからのもので、それまで足を運ぶことがなかったことを悔やんでいます。

高野山専修学院の同窓会が長崎で開催された時、慰霊碑と資料館に案内されたことも忘れ難いことである。

今一つ戦争関連で思い出すのは、愛宕小五年の頃だと思いますが、校庭から山陽線上下りする貨物列車に積まれて軍用車両である。下りは新車で、上りは破壊された車両が積まれていました。これは朝鮮戦争の車両であることは誰に聞かなくてもわかることでした。我国で起こっていたことが今朝鮮でおきているのだと…。

最後に今一つ、昭和二十七年八月に得度式の為に初めて登った高野山奥之院で、白衣を身に纏った傷痍軍人を何力所かで見かけたことでした。お国のために戦い負傷された兵隊さんが、戦後七年も経つのに人に憐れみを乞わなければ生きていけない人たちがいることを目の当たりにして、小六の私でも戦争はしてはならないことだと意識したことでした。



原爆供養塔

後年、得度した高野山三宝院で師僧（草繫全弘大僧正）が、奥之院弘法大師御廟前に世界平和を祈念されて「和」字百万枚揮毫を発願され、宗務総長という激務のかたわらに在院時は額に汗して揮毫を続けられていました。在院の学生さんや時には私も揮毫のお手伝いをさせ

ていただきましたが、師僧の平和を祈られる気持ちにひしひしと伝ったものでした。

その和字の石碑を自坊に帰山後すぐに建てさせていただきました。師僧の平和への強い思いを受け止めてのことでした。

今日、核廃絶とか軍事力増強反対を叫べば政治的な色合いでみられがちですが、私の平和への思いはそうしたことは無縁であることを云うまでもありません。

昨年ノーベル平和賞を受賞された原爆被爆者団体協議会の素朴で一途な平和への願いに通ずるものである。

イスラエルがイランに仕掛けた戦争はアメリカのイラン核施設爆撃で停戦になりましたが、これが恒久平和に繋がるかは誰も思わないのは不孝なことである。

イスラエルの国民、即ちユダヤ民族が長い歴史の中で生じた被害者意識を払拭しない限り周辺諸国との紛争はなくなるらないと、テルアビブ大学の某教授が中国新聞で述べておられるのを読みました。これは難しいことですが正にその通りだと思います。

勝つもの怨みを招かん

他に敗れたる者

苦しみて臥す

そのいづれをも棄て

こころ静寂なる人は

起居ともに幸いなり

(法句経二〇二)

こうした平和への思いと共に毎年日本のどこかで繰





凶鳥と梟の宿怨

昔、ある処にカラスとフクロウが近いところに住んでいて、互いに怨憎していました。

鳥は梟が昼間は眼が明らかならず、活動が出来ないことを知っており、群梟を襲い殺してその肉を引き裂き食べていました。

梟もまた鳥が夜間は眼闇なることを知って群鳥を啄みその腸を穿って食べていました。

だから、互いに昼を畏れ夜を畏れて安らかではありませんでした。

群鳥の中に聡い鳥ありて言いました。

「我ら、常に怨み憎みて救い難し。終にはどちらかが誅滅することになるであろう。

だから、生き残るべく方便を

もって梟を殲滅せん。その後は

我ら歡樂を得るべし」と。

それを聞いて他の鳥は聞きました。

「汝はどのような方法で梟の難を除こうというのかそれを聞きたいものだ」と。

聡き鳥は答えました。

「汝ら、共にわれを啄んで羽毛を抜きわが頭も突き破れ、この痛々しい姿をもって梟の所に行き梟を殲滅せん。即ち憔悴した姿で梟のすむ穴に行き、みずから悲鳴をあげて救いを乞うが如くす。こうしてわれ梟の巣穴に入らんと。」

こうして、聡き鳥はそれを実行したのです。悲鳴を聞いて梟は巣穴より出てきて言いました。

「汝はどうして頭破れ羽毛は抜け落ちし身で、どうして



我らの所にきたのですか」と。

憔悴した鳥は言いました。

「吾が仲間がわれと共に住まうことを拒み、われを虐げるので。我を憐愍して生かされんことを願うものなり」と。ぬけぬけと言いつつ放ったのでした。

梟は言いました。

「鳥は怨家なり親近すべからず。いかなる理由があつても怨敵を長養することはできないことだ」と。

そのとき一の老いた梟が言いました。

「困苦をもつて来たる鳥を無碍に追い返してはならない。一身孤軍なれば害あることなし。残肉を与えて傷

を癒せ」と。

こうして梟は鳥の奸計とは知らず養い、日月を経て傷は治癒し鳥は計画を実行に移すのでした。

鳥は梟の巣穴を出て乾ける木の葉を梟の巣穴にくりかえし運び入れるのでした。

これを見て不審に思つた梟は言いました。

「乾ける木の葉を我らが巣穴に運び入れるは何故ぞ」と。

鳥は言いました。

「巣穴の中は冷たい小石ばかりなり、これでは冷たく思ふ木の葉で風を防ぎ足元の暖を得んとするなり。これはわたしのせめてものお礼のつもりです」と。

そして暴雪寒風の季節となり梟はみな巣穴に籠るのでした。鳥はこのときを待つて牧牛の火を口にふくみ巣穴の木葉に点じたのです。梟はこれによつて殲滅す。

その時、諸天は言いました。

宿嫌あるところには、信生ずべからず。



## あとがき

梅雨らしい雨も降らず六月廿七日、早々に梅雨明けが  
宣せられた。こんなに早い梅雨明けは記憶にありません。  
長い夏の猛暑と水不足が心配になります。

お盆を控えて体調の維持管理が気になるところですが、  
寒さより暑さに弱い体質的なものもありますが、気力と  
いか精神力で乗り切るしかありません。毎年今年が最  
後のころつもりで頑張っています。

私の戦後八十年で忘れてならないことがあります。朝  
鮮人の遺骨九霊を祖国に送り返すことができたことです。  
その供養の参列者の中に宇部沖の「長生炭鉱の水非常を  
歴史に刻む会」の井上洋子代表がありました。

朝鮮人を含む一八〇名の方々の遺骨が未だ収骨され  
ずにあることは国の怠慢としか思えない。技術的なこと  
は二の次のように思うのです。井上氏の姿をテレビ画面  
で度々目にしての思いである。

戦後八十年の夏、毎年八月六日の広島原爆投下の日、  
犠牲者の冥福に加え、核廃絶の思いを込めて鐘を撞きた  
い。十五日の終戦記念日には、戦争のない世界を夢見て  
戦没精霊の供養をつとめたい。

その前に七月には参議院選挙もあります。インターネ  
ット上での偽情報に惑わされることなく候補者を見極め  
たいものです。

夏休み中の子どもたちの水の事故、さらには諸々の事  
故犯罪より守りたいものです。

発行者

寶池山 龍 門 寺

吉岡 光昭



雨の降る日も風の夜も

行者の身をば守り給う

げに有難や千代へても

利益あらたの活仏

……南無大師遍照金剛……



岩国市通津3634番地3 〒740-0044

高野山真言宗

寶池山 龍門寺 発行

電話 岩国(0827)38-4611